NC HOKKAIDO

Nature Conservation Society of Hokkaido

2002年 2 月 NO.115

…… CONTENTS ……

チョットひとこと……佐藤　正秀……2
国土交通省に要望書提出……3
日高横断道路が影響を及ぼす範囲を考える
……佐藤　謙……4
各地のニュース……6
ド口亀先生逝く……8
あ・ら・か・る・と……10
活動日誌、要望書など……11
お知らせ……12

ウラジロタデが咲く十勝岳のふもと　大久保　フヨ

社団法人 北海道自然保護協会

環境教育の必要性

昨年11月、千歳市より、総合学習の一環として環境学習の講師依頼があり、小学校３、４年生の前で話す機会ができた。それまでは、環境問題や自然保護に関心の強い大人と接することが多かったので、子供達の興味をうまく引き出せるか不安であったが、まもなく、それが杞憂であることが分かった。初めに鳥を通して、環境問題や自然保護の話をしたが、少々難しかったのか、大きな目をして静かに聴くだけだった。次に生態系の話になり、鳥の剥製、鳥の巣など自然界から持ち込んだ物を見せ、野生動物の話になると、子供達の様子が一変した。身近にある物でも注意し、「なぜこの様な形や色になっているのか、きっと敵に見つからないように。なぜこの様な所で生活をしているのか、食べ物が沢山あるから。等と疑問や想像しながら観察することが大切なことだ」と話した。

また、この体験は私にとっても、新しい発見がたくさんあった。子供達は、生き物に興味はあるが、野外に出て自然と触れ合う機会が少ないこと、そして自分で生き物を飼ってみたいと思っていること等が分かった。しかし、なかなか飼わせてもらえない理由に「世話が大変」、「生き物は死んだら可哀想」等があげられるのではないか。そこでお手軽にペットの飼育が体験できるバーチャル飼育（コンピュータ内で生き物を飼う事）がもてはやされている。アニマルセラピー（動物に触れ合うことによって心を癒す治療）に、ロボットも使われ出している。行政では、カラスの駆除をゲーム形式で行っている。この様な時代なので、生き物の飼い方、接し方、動物の駆除もゲーム感覚になり、生への畏敬が消滅している。

生きた動物を飼い、毎日休むことなく世話をし、死んでしまい悲しい思いをする中に、学ぶことがある。生あるものは死ぬから良いのである。生き物と接したい、飼いたいという芽を摘まないで欲しい。今回の授業も実際に野外に出て、子供達と自然を探索しながら、剥製の鳥ではなく、生きている野鳥に触れさせてあげたかった。

また、環境問題について、現在世界的にどの様な動きがあるかという事も、子供達に知ってもらいたい事の一つである。1992年リオ・デ・ジャネイロで開催された「地球サミット」（国連環境開発会議）から国家の対応は勿論、企業まで環境に対する責任を意識し始め、種々のリサイクル法が出来てきている。21世紀は、環境の世紀と言われている中、現在社会の考える環境とは、リサイクル、ゼロエミッション等、決して悪いことではない。しかし、経済優先の構造が見られ、自然保護が蔑ろにされている様に思う。少々難しいかもしれないが、将来を担う子供達に、自然のすばらしさ、楽しさ、反面の恐ろしさと共に、私たち大人が犯した過ちについても、知って貰わなければならない。これから、どの様にすべきなのか考える為に、現状の正しい知識を持つ機会を増やすことが、私たち大人の大きな役割ではないだろうか。

授業終了後、担当の先生から子供の学習のテーマに「環境」があり、自然環境保全に対する意識、関心の啓発を図っていくことは教育における必携課題だという話に共感した。

佐藤正秀（さとうまさひで）

（苫小牧市在住）

国土交通大臣宛「日高横断道路中止」要望書を1月22日提出

俵会長と高畑、嶋田理事が要望書を持って上京し、佐藤静雄副大臣に面談して手渡した。俵会長と佐藤副大臣はかつてテレビ番組で一緒になり顔見知りであったところから実現した。しかし、副大臣の「日高山脈」に対する理解は薄く、“自然保護関係者と協議しながら工事進めているから心配ない”とか、“中部山岳地帯は地質が脆いから道路工事できない（日高のほうがもっと脆い）”、挙句の果てに“この道路は私の知事選の公約であった”と言われた。

これに対して私たちは、日高山脈の自然の貴重なこと、開発局の事業再評価が不備なこと、「開発道路」の目的と違うことを指摘し、無駄な公共事業を止めるように要請した。時間が15分と限られていたために、要望書を手渡すに止まり、双方十分な話し合いにはならなっかった。しかし、地元選出副大臣に、利権を求めた陳情とは逆の「公共事業中止」の要望を届けたことの意義は大きいと思っている。

なお、この上京要請に合わせて、環境省に理解と協力を求める話し合いを申し入れ実現した。自然環境局、国立公園課の幹部の方と会談したが、日高横断道路問題の状況はよく理解されており、日高山脈の自然保護のために環境省として何ができるかという点から検討をしたいという発言もあった。私たちは、日高横断道路問題は1984年協議で決着済みと傍観せずに、環境省として時代の要請を受けて、再検討されるよう期待すると申し入れた。

「日高横断道路」中止に新しい組織が望まれる

協会では、かなり力を入れて活動を続けているが、建設理由も必要性も費用対効果も破綻していることが明らかなのに、今年の道予算には「日高横断道路」工事費が計上されている。理屈で勝っても、道・開発局は無視して工事を継続している。この様子をもっと大勢の市民に知ってもらって、工事を止める世論にまで盛り上げる必要がある。協会は今まで通り、再評価を求めて活動を続けるが、大きな世論の盛り上がりを引き起こす新たな活動組織が期待される。会員からも、直接参加して活動されるよう呼びかける。

論　説

日高横断道路が影響を及ぼす範囲を考える：エッジ効果について

佐　藤　　謙

「自然の奥深さと原始性」が特徴となる日高山脈核心部に、長大な横断道路が一本通されると、その自然はどのような影響を被るのだろうか。鮫島（1984）は、この道路建設の影響について「１枚の吸い取り紙にインキで１本の線を引くようなもの」、横断道路が日高山脈の大自然を分断することに対して「１カラットのダイヤモンドを２分の１カラット２個に、また４分の１カラット４個にして価値を下げる愚策」とそれぞれ比喩して、横断道路は日高山脈全体に大きな影響を及ぼすと危惧している。上記の比喩では「２分の１カラットのダイヤモンド」の値段が１カラットの半値以下になるので、それが「２個」あったとしても１カラットの値段に届かなくなる。だから「愚策」なのである。なお、この比喩を補強すると、日高山脈は国内最大級のダイヤモンドに例えるのが良い。

この比喩と深く関連する内容が、最近良く読まれている本、プリマック（1997）の「保全生物学」に書かれている。図のＡに示すように、一辺が1,000ｍ（１㎞）、面積100haの保護区を考え、仮に野良ネコが保護区の境界から100ｍ入って森の中を歩きまわるとして、森に棲む鳥が営巣し雛を育てることができるのは、この境界部分の面積36ha（900ｍ×100ｍ×４）を除いた64haになる。この境界部分をエッジ効果と呼ぶ。

他方、図のＢに示すように、この保護区に南北に幅10ｍの道路を建設し、東西に幅10ｍの鉄道を引き、保護区を四等分すると仮定すると、この道路と鉄道によって失われる面積はわずか２％（２ha＝1,000ｍ×100ｍ×２）に過ぎない。しかし、495ｍ×495ｍの面積に四分割された保護区では、野良ネコは車道や鉄道からも侵入するので、境界部分（エッジ効果）は面積395ｍ×100ｍ×４となる。その結果、鳥が生息できる面積は約8.7ha、保護区全体としては34.8haとなり、図Ａの64haから大幅に減少する。この例では、わずか２％の面積に影響を与えるとした行政側の予測に対して、保護区の分断化とエッジ効果によって、およそ65％の面積への影響を及ぼす結果となっている。

このように、生息地が分断化されるほどエッジ効果が増し、単純な予想以上に、生息できる面積が大幅に減少してしまう。ただし、生物の種類によってエッジ効果の及ぶ範囲が異なると考えられるので、道路や鉄道による分断化が及ぼす影響範囲については、上記の野良ネコと鳥の関係のように、種類ごとに研究・検討・評価していかねばならない。

生息地の分断化とエッジ効果については、都市に残存した自然林や二次林のように、とりわけ分断化された自然において注目されている。それは、緊急に、それらの研究とその後の対策を講じなければ、分断された場所では生息できなくなる種、絶滅する種の急増に結びつくからである。従って、人為の影響が多い地域では、その解決策として「緑の回廊づくり」が考えられている。

日高横断道路に関して、ただ１本の道路による影響は少なくないという非科学的な声もある。また日高横断道路に関する環境影響評価報告書では、植生から判断した道路周辺に及ぼす影響範囲が道路端を起点とした２～14ｍであると断定して、周辺への影響の少なさを強調している。しかし、エッジ効果は、約100㎞に及ぶ道路の両側に、相当の幅で作用するものと考えられる。先に挙げた文献では、エッジ効果

として日照などの微環境が変化し、植物に影響する範囲は道路の端から500mと記述している。現在進行中の工事では、事前の予測とは全く合致しない、幅100mに及ぶような崖地や崩壊斜面での法面工事が行われており、植物から見た影響範囲は、その法面の端からさらに500mとすると、道路の両側に合計1km以上の幅を持つと予想できる。

過去の林冠に被われる場合が多い狭い規格の林道から、今後の森林が完全に分断される広規格の車道への変化は、急峻な地形が卓越する日高地方では大がかりな法面工事を伴うので、動物を含んで、生物の種類ごとにエッジ効果が大幅に増大することは確実である。とくにダム湖や河川に近い場所での道路建設によって、水辺の生息地が分断され、エッジが増えると生息地を減少させる動物が多数いるように予想される。日高横断道路に関して、このような影響評価はいまだに調査も証明もされず、論議されていない。

先の文献では、エッジに沿って新たに侵入する生物、生息地を拡大する生物も記述されている。例えば、エゾシカをそれに該当させることができるように思われる。エゾシカは、とくに道央や道東において、近年ほど車道わきの外来牧草で被った人工的な法面で採食する姿を見かけるようになった。30年ほど前には大雪山の車道や日高山脈の林道で希に見かける程度であったエゾシカは、現在では交通事故が心配されるほど遭遇の機会が頻繁になっている。このことは、エゾシカの急増自体にも原因があると思われるが、一方でエゾシカが森林の泊まり場と草原の採食地がセットになった場所を好むので、背後を森林に囲まれ、栄養価の高い牧草が生えている道路の人工的法面が絶好の生息地になるからと考えられる。日高横断道路では、広規格の道路が延長するにつれて、法面も延長されるので、エゾシカが奥地まで高密度に生息していくことが予想される。道路によって森林が分断されエッジとなる人工的草原を造ると、エゾシカは生息地を拡大する生物と考えられるのである。また、外来牧草に混じった帰化植物、外来牧草を食べる昆虫類、それを食べる鳥類など、元々生息していなかった生物も法面に沿って侵入してくるであろう。このように、エッジ効果によって新たに侵入してくる生物、生息地を拡大させる生物についても、道路の影響として考慮しなければならない。

日本最大の国定公園、しかも奥深い自然にあふれた日高山脈核心部を通過する道路は、エッジ効果の観点からも、その価値を失わせる大きな影響が危惧されるのである。

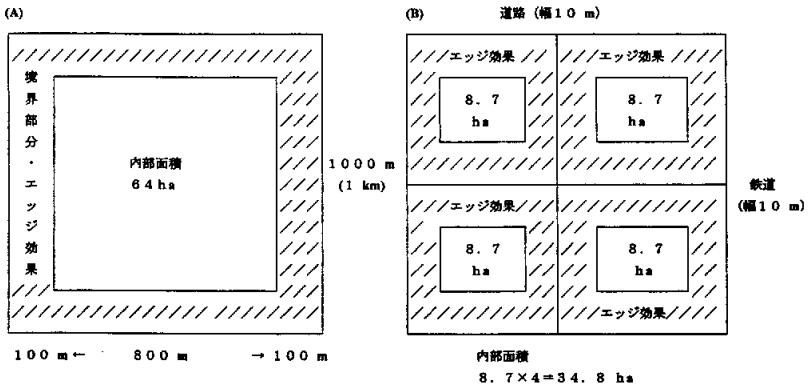


図. 分断化とエッジ効果による生息地の減少（プリマック1997）

北大のポプラ伐採に思う

田中　晴夫
（会　員）

1月26日早朝、北大構内中央道路のポプラ12本の伐採が始まった。樹齢はおよそ60年。気軽に考える人は、寿命が来たのだと思うかも知れない。しかし、樹木はそれぞれ命ある個体だと考えれば、そんなに呑気に構えてはいられない。

それぞれの樹木が固有の歴史を持つ個体だという見方を淡々と確信を持って教えてくれたのは、大阪の山本光二樹医さんである。山本さんを昨年4月に北大に呼んだのは小野有五先生である。2月に「北大キャンパスの樹林を考える市民の会」を立ち上げ、今度は山本さんの講演を聞き、一緒に構内のハルニレやポプラを見て回り、会員の有志も実地見聞をするという企画である。地味だが充実した数時間で、私たちはこの時に多くのことを学んだ。

今から約1年前、北大構内の老大木の取り扱いで突然問題が顕在化した。強く危機感を持った小野先生などの北大関係者が、「北大時報」一月号に載った、ハルニレ6本とポプラ12本の伐採をとりあえず中止させるために行動を始めた。2月10日、大学関係者と市民による最初の集会が北大で開かれた。新聞で知った私もその集会に参加し、以降現在まで自分のペースで行動してきた。この間特に感じたのは、漠然と親しみや信頼感を抱いてきた北大と私の間には、想像以上に深い溝があるということだ。一言で言えば、大学当局には一般市民の気持ちを考える姿勢が殆どないということである。総長、副総長、施設部の人々にもお会いしたが、結局何の足しにもならなかった。端的に言えば倒木や落枝による事故とその管理責任を免れるための方策だけが目立つ。「エルムの学園」とか「自然に恵まれたキャンパス」という謳い文句は観光会社のキャンペーンと異ならない。大学には環境問題や生物の優れた専門家も多いと思われるが、そのような学者・研究者がどうお考えなのか、私たちには殆ど聞こえてこないのである。私たち一般市民の耳に入ってくるのは管理責任を主張する頑なな管理者や施設部の声のみで、知性豊かな研究者の声ではないような気がする。　（小樽市在住）

かわいいおたより

高畑　滋
（理　事）

新年度より、学校現場には総合学習が導入されます。

それに先がけるように当協会には昨年より各学校の生徒や教師から自然に関わる問い合わせが多くありました。そんな中から今日は仙台市の福室小学校5年生の上野綾さん、大久美里さんのお便りを紹介します。

北海道自然保護協会のみな様へ

自然保護協会のみな様こんにちは
今、総合学習の勉強で自然のことを調べています。
質問をさせて下さい。
① 自然保護協会の人は何人ぐらいいるのですか？
② 自然保護協会の人はどんな活動をしているのですか？
③ どうしてこの活動をはじめようと思いましたか？
④ 昔にくらべ、どのくらいの木がへっているんですか？
あとできれば自然保護協会のみなさんの顔写真を手紙に入れておくって下さい。以上です。
いろいろわがまま言ってごめんなさい。

なぜか返事は2月17日までとあり、当協会の高畑がさっそく二人に質問の回答を送りました。写真のかわりに似顔絵を書いて。

◎私は　たかはた　しげる　66さい　顔は

「自分のフィールド」

大館　和広
（理　事）

協会の会員の皆さんはそれぞれに自分のお気に入りの場所をお持ちだろうか。身近な所にあり、そこへ行けば心休まる所。小さな緑地や河原、湿原。私はお気に入りの自分のフィールドを持つことはとても大切なことだと思う。

自分のフィールドを持ち、通い詰めることで色々なことが分かってくる。どんな花が咲くのか、どんな鳥が渡ってくるのかとか。同時にわかっていたと思い込んでいたことが勘違いであったり、新しく疑問がどんどん湧いてくる。それらを解消するために益々そこへ通うことになる。春も秋も、夏も冬も、晴れの日も雪の日も、雨の日も風の日も一年を通じて通うことで本当に色々なことが分かってくるし見えてくる。知らず知らずのうちに貴重なデーターが出来上がる。同時に愛着と責任感がでてくるだろう。

愛着と責任感、そして蓄えられたデーターが、どこにでもあるありふれた自然、身近な自然（一番大切にしなければならない自然）を守っていくための最強の武器となる。

自然観察指導員になった人から、「何から始めればいいのか」と尋ねられるが、私は身近な所に自分のフィールドを見つけようと話をする。そしてそこの自然を一年を通してよく見てほしいと話をする。大雪山や日高を護る運動はもちろん大切だが、身近な自然をよく知っておかないと、後で取り返しのつかないことになる。大雪山や日高は誰もがよく知っているし、データーもたくさんあるが、身近な自然はそれがないのだ。

今一度、自分の身近な自然に目を向けて欲しいと思うのだが。　（紋別町在住）

冬鳥と鉛中毒に思う

森田　正治
（理　事）

オオワシ、オジロワシ、オオハクチョウ、コハクチョウの冬鳥たちは、越冬のために北海道で羽を休めている。大型鳥類は、バードウオッチャーにとっては、迫力があり魅力的である。白鳥飛来地での餌付け自粛は、生態系を考えると当然と言えよう。

その冬鳥たちも北海道に飛来して、受難が続いている。数年前から問題になっているワシ類の鉛中毒は、その典型的な事例である。前シーズンからエゾシカ猟での鉛弾の使用が禁止になったものの、ワシ類の鉛中毒死はその前の年より増加している。今シーズンも鉛中毒死のオオワシが確認されており、狩猟期を終えた２、３月が気がかりである。

ライフル弾がエゾシカに当たると殺傷力を高めるために、シカの体内で弾が破裂散乱する仕掛けになっている。ハンターが死体を全て持ち去れば問題はないのだが、角やおいしい部分の肉だけを取り、他を「残滓」と称して放置。残された鹿肉をワシ類が食べ、鉛片が胃で溶かされ、急性・慢性の鉛中毒症となる訳である。

鉛弾の使用が禁止されたとしても、環境問題として協力を呼びかけるだけで、取り締まりの方法がない。証拠の弾は飛んでしまい、猟区での所持禁止にしないと効果がない。何よりも、１日に２頭、３頭と持ち帰れないほど狩猟させるところに解決のキーポイントがありそうだ。１日１頭の時には、鉛中毒の発生はなかったのだから。

ハクチョウなどの水鳥は、湖底の水草を食べたり、砂のうで、消化を助けるための小石を飲む際、間違って鉛散弾や釣りのおもりを口にすることがある。美唄市の宮島沼では狩猟自粛となった今でも鉛中毒の水鳥が保護されている。今回、国際鳥獣保護区やラムサール登録の動きは、大変喜ばしいことだが…。

鳥類の鉛中毒は、心ないハンターや釣り人等全てヒトが加害者であるだけに、真剣に考えなければならない。彼らとの共存を模索しているのだが……？　（紋別市在住）

ありがとう

ーどろ亀先生逝くー

どろ亀先生は、1月30日朝御逝去されました。思えば昨年10月“日本の森と自然を守る全国集会 in 北海道”が、先生の元気なお姿を見る最後になりました。夜の交流会ではドロ亀さんとヤギさんの米寿の祝いもあり、花束とお祝いのメッセージをもらい喜んでいたお顔が、当日の司会をした私には、昨日のことのように鮮明に思い出されます。私がひとつ残念に思うことは、山小屋に「おいで」と言われながら一度も訪ねなかったこと。生き物すべて友だちと思っている私とは、きっと山小屋での話は盛り上がったと思います。前おきが長くなりましたが、ドロ亀先生をよく知る方々から思い出のひとことを頂きました。ここに、御冥福をお祈りしたいと思います。

（大久保フヨ）

天上のどろ亀さんへ

八木　健三

どろ亀さんと初めて親しくお話したのは、20数年前5月、野幌付近で行われた植樹祭のときだった。弁当についていた1合ビンを傾けながらのお話、その数年前、サッポロ冬季オリンピック開会式に臨席された昭和天皇・皇后両陛下に、その日の午後知事公館でどろ亀さんが「森林の働きと新しい林業経営」をご進講申し上げることになっていた。ところが、一杯やらないとお話ができないのがどろ亀さんの悩み。それでモーニングのポケットにウィスキーの小瓶をしのばせていたが、公館周辺は警官・私服がとりまいて、「一寸一杯」というわけにはいかない。

思いあまったどろ亀さんは、トイレに飛びこんで「グー」と一杯。「こうしてご進講はたいへんスムーズにできたよ。陛下からもいろいろご下問もありましてネ……。」

一杯やってゴロンとなり、宇宙人になったどろ亀さん。天上でも一杯やりながら、愉しい日々を送って下さい。

「第14回日本の森と自然を守る全国集会 in 北海道交流会」実行委員長のあいさつを聞くどろ亀先生　右から八木先生、立松和平さん

どろ亀先生〝米寿のお祝いのことば〟を受ける。

さ よ う な ら

山小屋の“泥棒”ネズミ

前田　満

ある日、どろ亀さんが研究室（鳥獣）を訪ねて来て言った。「山小屋の食糧を盗む奴がいる、調べてくれ」

カラマツの丸太でこしらえた山小屋は、札幌市「平和の滝」で車を止め、手稲の登山道を300mほど登ったところにある。翌日、どろ亀さんの案内で山道を登った。どろ亀さんは、目の前を横切るカケスに声をかける。「ほう！ほう！迎えにきてくれたか！元気だったか！」

近くに住む私は、カギをあずかり山小屋に通った。数日後、“犯人”を探しあて、どろ亀さんに「実地検証」をしてもらった。それは、高床式小屋の入り口に架かる梯子のような階段から室内の食糧庫まで、10センチ間隔にトーキビ粒を並べて誘導し、室内の床に撒いた麦粉にアカネズミの足跡を残させたのだ。

どろ亀さんは、いたく感激して、私を「動物の科学者」という匿名で、最初の自著に紹介している。

米寿の祝いの花束を持つ
どろ亀先生

ボク達88才になりました。
これからも元気に長生きしまーす。

どろ亀の股くぐり

高畑　滋

どろ亀はゆっくりと壇上に登って、森と自然を守る全国集会参加者に呼びかけた。

「遠いところをよくいらっしゃいました。どろ亀も年をとったので長くはしゃべれません。ビデオで日本一美しい森を紹介します。スタート！」

どろ亀は久しぶりに満足していた。ビデオとはいえ全国から集まった自然を守る仲間たちに森の話をしたからだ。「森にはムダがない、ウソがない、後は頼んだぞ」

夜の交流会の酒はうまかった。ご機嫌で八木健三さんの股くぐりをした。

「どろ亀がヤギの股くぐりをすれば拍手喝采、ブルドーザーが日高のまたくぐりでトンネル掘れば、そんなところにどろ亀は住めない。」

ほんとうの宇宙人になったどろ亀は、銀河のまたくぐりをしながら、「後は頼んだぞ。」

新　刊　紹　介

「里山の環境学」

武内和彦・鷲谷いづみ・恒川篤史　編
Ａ５判・上製本・264頁／
定価（本体価格2,800円＋税）

里山ルネッサンス

ふるさとの風景――日本の里山、自然と人間が共存する場である里山を未来に伝えるために私たちがなすべきことはなにか、科学、市民、行政などさまざまな立場から、グローバルかつローカルな視点で、これからの里山との関わり方について論じた〈里山学〉の書。

新　会　員　紹　介

2001・11から2002・1まで

【Ａ会員】

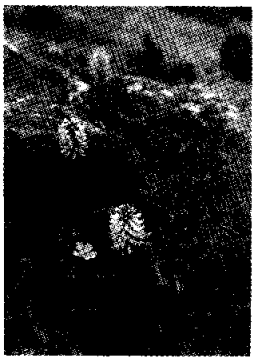
柿沢　宏昭　近藤　敦子

「夕張岳の花」ハガキ

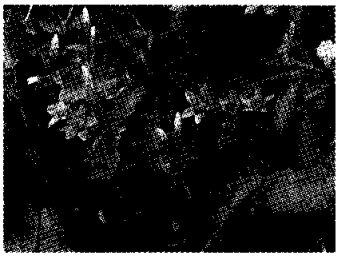
写真　梅沢　俊

Ⅰ・Ⅱ部（各６枚セット）350円（各）

ユウバリコザクラの会は「北海道希少野生動植物保護条例」の制定を記念して北海道新聞野生生物基金の助成で美しいハガキセットを作成しました。協会にもあります。



ユウバリソウ・
ユウバリキンバイ



ユウバリ
リンドウ

協会財政を支えるために「ＪＣＢ提携カード」の利用をお願いします。

自然を守るためにささやかな協力を！

- 日本野鳥の会や道新野生生物基金などで導入している「JCB提携カード」を、北海道自然保護協会でも導入しました。
- 協会会員以外の方にも広く募集していますのでご協力ください。
- JCBカードを持つ予定の方は是非「JCB提携カード」で入会してください。（すでにJCBカードを持っている方も重複して入会できます。）
- 入会申込み書は協会事務所にご請求下さい。
- JCB提携カードに入会すると、貴方の買い物金額の約0.4％がJCBから協会へ支払われます。（会員の負担はありません）

JCB提携カード

- 「JCB提携カード」の機能は通常のJCBカードと同じです。（機能についてはJCBへ問い合わせてください）

活動日誌

2001年11月

10日：札幌拓北緑地で植樹祭・羊ヶ丘ライオンズクラブと共催

21日：札幌白陵高校放送部来訪クマとの共生問題取材

22日：第4回拡大常務理事会

2001年12月

5日：北海道アウトドアガイド資格審査委員推薦問題で道地域政策課と話し合い

22日：第3回理事会

2002年1月

21日：第5回拡大常務理事会

22日：国土交通大臣宛「日高横断道路」要望書を佐藤静雄副大臣に提出するため上京
環境省自然環境局長、国立公園課長、公園計画専門官と面談し、日高山脈の自然保護について要請

29日：自然保護学校開校

2002年2月

18日：第6回拡大常務理事会

26日：自然保護学校終了式

会員の皆様へのおわび

2002年自然保護学校と自然保護講演会が下記の日程で行われました。NC（会報）発行日の関係により、会報に掲載できなかったことをここにおわびいたします。これからは事業に余裕を持って企画し会報に早く掲載できるようにいたしますのでご了承下さい。

記

2002年自然保護学校

1月29日(火)　開校式・「ビオトープについて」
鮫　島　惇一郎
（自然保護学校校長・自然環境研究室主宰）

2月5日(火)　「自然観察のこと始め」
俵　　浩　三
（専修大学北海道短期大学名誉教授）

12日(火)　「生き物の里をつくる仲間たち」
伊　達　佐　重
（北海道自然保護協会常務理事）

19日(火)　「植物から学ぶ」
佐　藤　　謙（北海学園大学教授）

26日(火)　「川を中心とした環境学習」
根　岸　　徹
（北海道自然観察協議会理事）

自然保護講演会

3月9日(土)　「トラジロウ（ヒグマ）のコリドーとその保全問題」
青　井　俊　樹
（岩手大学農学部環境科学科森林科学講座教授・日本クマネットワーク代表）

要望書など

■2001年12月17日　千歳川流域治水対策検討委員会小林好宏委員長宛
千歳川流域治水対策「堤防強化（遊水地併用）案」について意見

■2002年1月22日
国土交通大臣、北海道知事宛
日高横断道路（道道静内中札内線）事業の抜本的な再評価を求める要望書　北海道自然保護協会・十勝自然保護協会・北海道勤労者山岳連盟・北海道自然保護連合の共同提出

■2002年1月22日　北海道知事宛
日高横断道路（道道静内中札内線）事業の執行にかかわる道政の進め方に関する質問書

■2002年1月25日　北海道知事宛
「春季クマ捕獲」に関する質問状

■2002年1月29日　北海道知事宛
遊楽部川における人身事故の危険性が高い工事に関する意見並びに質問書

■2002年1月30日
室蘭開発建設部中野修部長宛
沙流川水系河川整備計画（原案）に関する質問・意見書

■2002年2月8日　北海道知事宛
特定鳥獣保護管理計画の樹立に係わる意見書

■2002年2月8日　北海道知事宛
カラスの有害駆除について意見書

2002年度総会と公開講演会

2002年度通常総会と公開講演会を下記の要領で開催します。

日　時：5月18日（土）
総　　会　午後1時～3時20分
公開講演会　午後3時半～5時
場　所：かでる2・7、7F

2002年度通常総会は、理事の改選期に当たりますので、ぜひご参集ください。また、公開講演会では、冨士田先生により2001年に訪問された色丹島の感激を伝えていただきます。

演　題：「色丹島の植物」
演　者：冨士田　裕　子　氏
（北海道大学助教授、北方生物圏フィールド研究センター植物園）

講演会

「千島列島の植物」

北海道自然観察協議会主催で、以下の講演会が開かれます。当協会活動テーマの一つである「北方四島の自然保護」に深く関わりますので、また高橋先生はこの数年間、千島全島の植物研究を精力的に進めておりますので、ぜひご参集ください。

日　時：4月20日（土）
午後2時半～4時（2時20分受付）
場　所：北海道環境サポートセンター
札幌市北区北7条西5丁目
演　題：「千島列島の植物」
演　者：高　橋　英　樹　氏
（北海道大学教授、総合博物館）
問い合わせ先：須田（Tel：011-752-7217）
参加無料、申し込み不要、当日直接会場へ

スーパー狂言「ムツゴロウ」

札幌テレビ放送・朝日新聞社北海道支社・STVメディアフィールズ21主催のスーパー狂言「ムツゴロウ」が下記の要領で開催されます。全国的な自然保護問題、諫早に関わる催しですので、会員の方に推薦いたします。

日　時：5月24日（金）
場　所：札幌メディアパーク・スピカ
札幌市中央区北1条西8丁目
昼講演（午後3時開演）
「梅原猛講演会」と「ムツゴロウ」
夜講演（午後7時開演）
「妙音へのへの物語」と「ムツゴロウ」
入場料（5,000～8,500円）などの問い合わせは、
STVメディアフィールズ21
（Tel: 011-272-2321）

協会のホームページ

http://www.jade.dti.ne.jp/~nchokkai/kansatu.html

協会では、会誌やNC（会報）の他に、ホームページでの活動報告・意見募集も行っておりますので、ぜひご覧になってください。会員の皆さんには、協会宛に直接の手紙であっても、ホームペイジ上の意見欄であっても、常に活発に、ご意見を寄せていただくこと願っております。

会費納入のお願い

協会の活動は、会員の皆さんによる総意と会費に基づいております。まだ会費未納の方がおられましたなら、下記に納入くださいますよう、宜しくお願いいたします。

個人A会員	4,000円
個人B会員	2,000円
（A会員と同一世帯の会員）	
学生会員	2,000円
団体会員　1口	15,000円

〔会費納入方法〕
郵便振替口座　02710－7－4055
北洋銀行大通支店（普通）　0017259
北海道銀行本店（普通）　0101444
札幌銀行本店（普通）　418891

※ この紙は再生紙を使用しています。

NC2月号 No.115
二〇〇二年二月二十五日発行　社団法人北海道自然保護協会・俵　浩三
〒060－0003 札幌市中央区北三条西十一丁目加森ビル5 六階 ☎（011）251・5465
会費　個人A会員四、〇〇〇円　個人B会員二、〇〇〇円　学生会員二、〇〇〇円　団体会員一口一五、〇〇〇円　郵便振替0271 0・7・4055　印刷　㈱広報社印刷